

9月24日(土) シンポジウム第7室(412)

解テストの導入を催促する声が強かった。

これに対し、設問に対する答えを○×のいずれかで採点することを余儀なくされているが実は△的な答えもあり、もっと幅広く、あるいは視点を変えて採点できれば結果は異なるであろう。要するに言語能力を判定するには、もっと柔軟性が必要であるという意見もあった。今までわれわれはあまりにも accuracy に重点を置きすぎ、fluency とか amount という点を軽視してきたのではないかということも話された。

各上級学校は英語についてどのような学生を入学させたいかという質問もあった。「中学校と高等学校間」や「高等学校と大学間」のいずれにしても、「こんな入試は難しすぎる」に対し「これ位の出題でなければ満点者が多く出すすぎる」といった論議を続けても水かけ論に終始するだけで無意味になるため、各学校での具体的な指導について意見を聴取した。

2の指導法について。特に中・高等学校では、どのようにして学習に興味をもたせるか、復習等はできる限り英語による oral exercises を行って習慣化させているとか、日常生活についてQ Aの練習をすとか、それぞれ工夫がされている。

大学においても学生達は聞くこと・話すことの練習ができる授業を求めている。

指導内容についても、アメリカに傾倒せず、もっとアジア、ヨーロッパに目を向けるべきだ等々活発な意見が相次いだ。

3の外国人講師との Team-Teaching について。昭和61年度までは、文部省の管轄するプログラムで米英両国から大学卒業生を招致し、特に公立の中・高等学校を訪問させて、生徒に対し学習の動機づけを行うこと等を主なねらいとしていた。昭和62年度以降はJETプログラム(文部省、自治省、外務省が管轄)により、ニュージーランドを含む5カ国から、昨年度は814名、今年8月は1,150名余りが各都道府県に着任している。このうち英語教員助手の有資格者をAETと称し、学校等で所定の仕事に従事する。

学校によっては受け入れ態勢が不十分なため好機を逸する所もあるだけでなく、日本人教師との効果的なTeam-Teachingの在り方を研究することが急務となっている。

AETに日本の文化・風習についてよく知ってもらうためのオリエンテーションが重要であり、また互いに言語の違いや障害を越えて普遍的なよい人間関係を築くことが必要である。そのため、とりわけ日本人教師の英語運用能力が期待される。

4の教員の海外研修について。上記3で述べたとおり、教員自身の英語力がこれ程問題になる時は今までになかった。国内での研修はもちろんのこと、海外での研修についても自費以外で、もっと多くの教員が研修に出られるような行政上の計画が求められる所である。

また教員同士の交流等も、県レベルで交流協定が策定されるよう働きかける必要もあろう。

◆「国際英語」 佐藤 秀志

第二次世界大戦後40数年の間に、英語を母語または公用語として使用している国('the new English empire')は世界で40を超える。また程度の差こそあれ、英語を理解し、話す人の数は世界人口の5分の2を占める。さらに顕著な特色は'the new English empire'の外に住む人たち(the expanding circle -B. Kachru)の英語に対する需要・要求である。とくにここ数年の中国における英語学習者人口の急速な増加は注目に価する。

英語はもはや単なる「外国語」(EFL)としてではなく「国際語」(EIL)であるという感覚で学び、教えるべきものである。現実に EIL となっているにもかかわらず依然として 'one of the foreign languages' として、他の外国語と同じ意識、同じパターンで扱っていることが問題である。とくにこれからは非母語話者同士 (non-native speakers of English) のコミュニケーションの手段としての英語を考慮に入れる必要がある。

「国際英語」研究チームは今日までに10回の会合を持ったが、取り上げたトピックは次のようなものである。

1. 英語の拡散と「標準英語」について
2. 'International English' の実態 --シンガポール英語、インド英語、PNG英語、etc.
3. Larry E. Smith の EIL についての考え方 --中山行弘氏の「英米文化にしばられない、多国籍化した英語を日本人が理解でき、さらに学習者が日本人として主体性のある英語で自己表現できるような英語教育を志向すべきである」という意見はL. Smithの考え方を踏襲するものである。この考えをわが国の学校教育で実施した場合の方法論が問題である。中学・高校では基礎力が大切で、モデルとすべきは教養ある英米人の話したり書いたりする英語である。標準英語、標準米語は、他の多くの英語の変種に対して 'reference norms' の役を果たすからである。学習、教育の過程では Am EやBr Eをモデルにすべきもので、結果として発音が日本式英語になる。それぞれの国のなまり、特色を持った英語の変種に聞き手が寛容になることが要請される。

本年度の大会のテーマは「日本とアジアの英語教育」であり、シンガポールのDr. Catherine Lim が招かれている。40年そこそこの歴史しか持たないシンガポールに、華人でもマレー人でもインド人でもない「シンガポール人」としてのidentityを確かめていく上で、この国の共通語としての英語で書かれた彼女の短編集--They Do Return(1983), Or Else, The Lightning God & Other Stories(1980)など--は、われわれに新しい英語文学の果たす役割を教えてくれる。

4. 中国の英語教育(Cf. English Today, TESOL)
5. 韓国と日本の学生の英語学力・学習態度の比較

以上は今日までに取り上げられた話題であるが、「国際英語」の実態は何年をかけても調査しきれないように思える。今後取り上げられそうな話題のいくつかを列挙したい。

- a. 英語の世界的拡散についての社会言語学的考察 Cf. GURT '87, Georgetown Univ. Press
- b. いわゆる「ジャパニーズ・イングリッシュ」について
- c. EILをめざす教材論
- d. EILをめざす方法論
- e. AETとの接触を通じてEILの実態を学ぶ

激動する世界史の流れのなかで、日本文化も急速に交流型に変わることを迫られている。国際的な協力と対話こそ日本の生きる道である。これからの英語教育の果たす役割もここにあると信ずる。

◆ 「文学と英語教育」 山本 利治

この研究チームは、一般教育課程の学生を対象に、文学作品を教材として効果的